

臨床整形超音波学

笹原 潤，宮武和馬・編

【評者】 福井 勉 (文京学院大学教授・理学療法士)

B5判・392頁
2022年8月
定価：7,920円
(本体7,200円＋税)
ISBN978-4-260-04691-6
医学書院 刊



序文にもあるが、本書は若手整形外科医を中心に執筆されている。まだ新しい技術ともいえる超音波を利用した診断や治療が千万無量に書かれている書籍である。また、超音波を共通言語として理学療法士とタッグを組むと記載されている、今までにはない書籍である。

章の構成は「1. はじめの1歩」、「2. ネクストステップ」、「3. 新たな技法」、「4. マスターへの道」、「5. PTに学ぶ身体所見」、「6. 理学療法における超音波の活用法」となっている。どの章もインパクトが強いが、4章で語られる「神経の攻めかた」などは、整形外科医はもとより理学療法士にも深く参考になると考えられる。

どの項にもエコー画像と描出のポイントが正常像・疾患像とともに数多く示されていて、見ていて飽きない。頭の中で、解剖学とすり合わせてイメージを構築し、画像ごとに理解を深めることが可能になっている。またID登録が不要で、QRコードからすぐに動画が見られるのもうれしい配慮だと感じる。これらの動画は、さまざまな驚きを読者に与えてくれるのではないだろうか。

身体へ負荷される外力が、身体内部でどのような伸張、圧縮、剪断などのメカニカルストレスを生じさせ、局所的な動きの不全に至るかのメカニズムに関する研究は、近年、可視化という強力な武器を得て大幅に進歩している。本書にはその多くの知見が記載されているが、技術的なアップデートは著しく、日々改善されている。その意味で、この書籍をいつ読んだらよいのかと言えば、

当然「今」ということになる。

書籍全体にはそれぞれの臨床家としてのこだわりがみられ、よく読むと「なぜ」そのような治療に至ったのかという発想の奥に人間性も感じられるような気がする。本書はその観点に触れながら、エコーを手にした状態で読み進めることが望ましい。また、技術を高めるためには、教科書のように序章から読み進めなくても、解剖書や解剖アプリとの併読がよいかもしれない。各項には「よく聞かれる質問」コーナーがあり、執筆者に直接聞きにくい内容が記載されているのも、私のような超音波初学者には大変ありがたい。

疾患の病因を把握する際には、「器質的」あるいは「機能的」という言葉が多く用いられる。特に機能的と称される内容に包含される「動きの不全」については、「頭の中のイメージ」が先行していた。局所的な軟部組織の硬さや滑走性の改善が、周辺の機能的改善に結び付くことが、可視化されてやっと納得できることは多い。特に身体内部を可視化する機会の少ない理学療法士には、よい機会である。また事象の可視化、具現化により、解剖用語を基盤とした会話が成立しているのは本当に喜ばしいことだと思う。

超音波を介して、整形外科医が理学療法士と共通した言語を持ち、「機能不全」にタッグを組んで立ち向かう姿は、近年の新しい治療の姿を示してくれているとも感じられる。胸襟を開いて企画された編者の包容力とともに、執筆者の方々の日常臨床の創意工夫がちりばめられた良書である。